

同12月7日肝右葉切除+リンパ節切除を施行した。2013年3月現在、画像上は明らかな再発所見なく、AFPも23 ng/mlと低下し、ソラフェニブ内服治療を継続している。

P2-36.

放射線による転移抑制機構の解析

(医学総合研究所)

○藤田 英俊、荒谷 聡子、西岡久寿樹
中島 利博

現在、手術のように体の一部を切り取ることなく、組織や機能を残したまま治療ができる放射線療法の重要性は、がん治療において高まっている。そのため放射線照射によるがん転移抑制/促進への影響について関心が高まりつつある。これまで、*in vitro*の細胞実験において、腫瘍への8 Gy以下の低線量の放射線の照射により細胞の運動能が抑制、または、促進されることが明らかにされている。(Fujita M et al. *Cancer Sci.* 2011, 102: 792-8. Fujita M et al. *Cancer Sci.* 2012, 103: 677-83.)。さらに一方で、*in vivo*マウスモデルにおいては、マウス下肢に形成させたマウス扁平上皮癌由来NR-S1腫瘍に対して高線量のガンマ線15 Gyを照射すると、局所腫瘍の増殖を抑制しないが、肺転移を抑制することも報告されている(Tamaki T et al. *Int J Radiat Oncol Biol Phys.* 2009, 74: 210-8.)。しかしながら、高線量照射による肺転移抑制の詳細なメカニズムについてはいまだ明らかではない。本学会では、マウス細胞を用いて高線量の放射線による転移抑制メカニズムについて検討した結果を報告する。

P3-37.

裂孔原性網膜剥離における眼内液性因子と臨床的背景

(社会人大学院3年眼科学)

○上田俊一郎

(眼科学)

臼井 嘉彦、若林 美宏、田島 一樹

奥貫 陽子、村松 大弐、石川 友昭

毛塚 剛司、後藤 浩

【目的】 裂孔原性網膜剥離(RRD)の病態解明を目的に、前房水および硝子体液中の種々の液性因子と臨床経過の関連について検討した。

【対象と方法】 対象はRRDに対して硝子体手術を施行した50例50眼で、年齢は58.8歳(41-79歳)、男性39例女性12例である。術中に採取した前房水と硝子体液中のIL-6、IL-8、VEGF、Angiogenin、MIG、IP-10、MIP-1 β 、MCP-1など27項目の濃度をCytometric Bead Array Flex kitで測定した。対照群として前房水は眼底疾患のない白内障23眼、硝子体液は網膜前膜9眼とした。眼内の液性因子濃度とRRDの病像および臨床経過を比較検討した。

【結果】 RRDでは対照群と比較して、前房水中ではIL-6、IL-8、VEGF、MCP-1濃度が上昇しており(いずれも $p<0.01$)、硝子体液中ではIL-6、IL-8、MCP-1、IP-10濃度が上昇していた(いずれも $p<0.01$)。また、前房水中のMIG濃度と症状出現から手術までの期間は正の相関を示し、IL-6濃度およびMCP-1濃度は症状出現から手術までの期間と負の相関を示した。そして、前房水中のMIP-1 β 濃度と剥離範囲の象限数は正の相関を示した。一方、硝子体液中ではMIG濃度と症状出現から手術までの期間が正の相関を示し、IL-8濃度は負の相関を示した。さらに、IL-6濃度およびMIP-1 β 濃度と剥離範囲の象限数は正の相関を示した。

【結論】 RRDの眼内液中には種々の液性因子の上昇がみられ、一部には臨床的背景との相関が確認された。